

興行街から活動写真街へ —公文書から見る明治末浅草六区の変容

沓沢博行

東京都江戸東京博物館学芸員

はじめに

1. 浅草公園地第六区の成立
2. 明治中期の浅草六区
3. 電気館の登場
4. 活動写真館の増加と変容
5. 興行街から活動写真街へ

おわりに

キーワード 浅草公園、浅草六区、活動写真館、明治時代、公文書

はじめに

まずは浅草六区を写した写真絵葉書を1枚紹介したい（図1）。大勢の人々で賑わう通り沿いに、特徴的な外観の建物が立ち並んでいる。これらは全て活動写真館である。掲げられた幟や看板には「清水一角」「熊坂長範」「金色夜叉」など上映作品のタイトルが並ぶ。作品の公開日は全て1912年（大正1）8月11日である¹ことから、同年8月中旬頃の浅草六区を写したものと考えて良いだろう。この年の7月30日に明治天皇が崩御され、明治から大正へと元号が代わった。六区も喪に服し一時期営業を自粛するが、間もなく再開している。絵葉書には再開後の賑わいを示す意図があったのかもしれない。

この時期の浅草六区は、活動写真街と呼んで差し支えないほど数多くの活動写真館があり、そのど



図1 1912年8月中旬の浅草六区（絵葉書） 館蔵 88132949

れもがここに写るような特徴的な外観を持つ建物であった。だが、こうした街並みが形成されるのに擁した時間は、六区に2軒目の活動写真常設館が開業した1907年（明治40）から数え、わずか5年ほどでしかない。その間に六区は江戸以来の様々な見世物興行が行われていた街から、活動写真の街へと代わっていった。本稿は、そうした明治40年代の浅草六区で起きた、見世物興行から活動写真への業態の劇的な移行と、それに伴う街並の変化について、検証を試みるものである。

はじめに先行研究について整理したい。明治・大正期における、東京の活動写真館の開館時期については、『映画史料』に発表された柴田勝の詳細な研究があり²、また稲葉和也は明治から昭和期に至るまでの浅草の街並みの変遷について、地図に落とし込み描き出している³。そして上田学は活動写真館と観客という関係性を軸に、六区の発展を論じている。⁴これらによって、浅草における活動写真館の展開について大枠として把握することが出来る一方、この特異な街並みが何故、そしていかにして形成されたのかというミクロな視点の問いに対しては、より詳細な検証が必要となろう。

その検証に際し、本稿において主に使用するのは「公文書」である。後述の通り浅草六区は東京市（成立時期には東京府）が管理する公園内にあったため、建物の新築・改築や大規模な外装の変更、東京市から借り受けている土地の収受、名義変更などの際には市への届出が必要だった。これらの届出のうち、明治40年以降のものについては東京都公文書館にまとめて収蔵されており、六区にどのような変化があったのかを動的に把握することが可能となっている。本稿では、それら公文書を新たに資料として用いて、明治40年代の浅草六区の変容を改めて検証していきたい。

1. 浅草公園地第六区の成立

本論に入る前に、まず浅草六区という地域がどのようにして生まれたのか、その経緯を簡単に振り返ってみよう。

後に「浅草公園地」と呼ばれるようになる地域は、江戸時代においては金龍山浅草寺の寺領であった。しかし時代が移り1871年（明治4）、社寺領上地の太政官布告が出され、一体は全て官有地となった。そして、1873年（明治6）1月15日に出された太政官布告第十六号⁵によって国から、「公園」を設置するという方針が示される。翌日には東京府が浅草、芝、上野、深川、飛鳥山の5箇所を候補地として大蔵省へ申し出、同年3月正式に浅草は公園地となった。

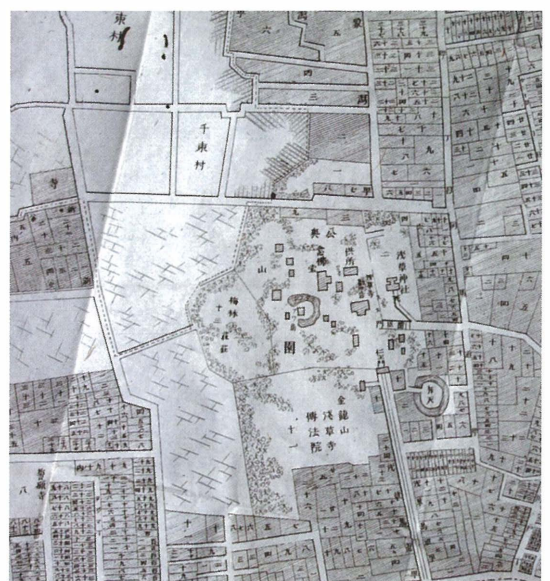


図2 六区開発前の浅草公園周辺「改正区郡東京切絵図」1880年（明治13）館蔵 99200328

なお、この時に言う「公園」は、現代の我々が認識する公園とイコールにはならない。太政官布告では、公園を「万人偕楽の地」すなわち、人々が楽しむ、行楽をする地というような表現をしており、緑地、自然が豊かであるというようなことを重視している表現ではない。とはいえ、浅草以外の4箇所は桜の名所なども含まれ、比較的自然の多い広大な土地であったことは事実である。ただ、これら公園地を運営していくためには、相応の収入が必要で、公園自体への入園料を取ることもないこの時期、自然の魅力は直接収益には結びつきづらかった。そうした中で、江戸以来の盛り場を内包する浅草公園は、数多く出店する店や興行から地代を得ることが可能で、東京府は浅草での収入をもってこれら5公園の経営を安定させる意図を当初から持っていたようだ⁶。実際、1877年（明治10）における公園地全体の繰越金を除いた総収入が8,791円なのに対し、浅草公園の収入はそのうちの60%を占める5,276円で⁷、事実公園運営資金の大半を浅草が稼ぎ出していたことが分かる。

そして、この収入をさらに増やすべく、1882年（明治15）より浅草公園地を拡張するための「浅草田圃」埋め立て工事が始まる。浅草田圃は火事の延焼を防ぐための「火除地」として江戸時代より広大な面積が確保されていたもので、1880年（明治13）の地図（図2）でもその様子をうかがうことができる。

工事は1882年（明治15）9月25日に着工し、翌年5月26日に竣工した。その過程で「大池（俗称：ひょうたん池）」が造成され（図3）、掘削時の揚げ土が埋め立てに活用された。そして1884年（明治17）1月16日、浅草公園は六区に区分され（図4）、浅草六区が誕生している。六区はさらに一号地から四号地に区画され（図5）、浅草寺境内奥山に展開していた様々な見世物興行は、防火上の懸念や公園地財源の拡張のため、新設の六区へと移された。なお、浅草公園

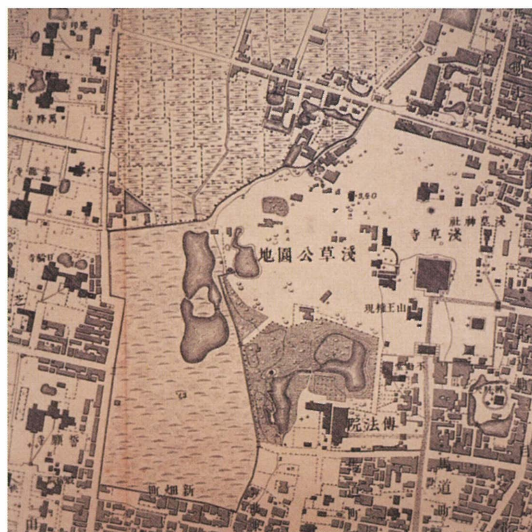


図3 大池開削後の地図「東京北東部 浅草及下谷」
1884年（明治17）実測 館蔵 08000144



図4 浅草公園地の区分け（1～6区）



図5 完成した浅草六区と1～4号地の区分け（赤囲み部分）「東京実測図第四号」1895年（明治28）
館蔵 87100149

においては、営業が許可される業種が区ごとに定められており、後述するが建物の大きさや高さにもそれぞれ規制があった。

こうして成立した浅草六区は、見世物が三・四号地に限定されたこともあり、最初は集客に苦しんだが、後に一・二号地でも出店が許可されるなど規制も緩和され、興行の街として徐々に賑わいを見せ始めた。そして1887年（明治20）には六区最初の劇場となる「常盤座」が三号地にオープン、1890年（明治23）には隣接する地に凌雲閣が建てられるなど、ランドマークとなる建物も現れた。

2. 明治中期の浅草六区

次に活動写真街となる以前、興行街としての六区の状況を確認したい。明治20年代の六区には、西洋から学んだ新たな技術であった玉乗りや手品のほか、江戸以来の人気を誇った松本喜三郎や安本亀八らによる生人形、武士の技能を見世物へと転化した撃剣会など、様々な興行が展開していた。また、高所遊覧施設として開業し、後に台風で崩壊、廃業した富士山縦覧場の跡地には日本パノラマ館がオープンし、人気を集めた。

そうした中、1896年（明治29）4月10日に六区は大規模な火災に見舞われ、その大半が焼失してしまう。この火災について取り上げた記事は多く、そこから当時どのような興行があったのかも読み取れる。一部を下記のように抜き出した。

【火災で燃えた興行場 （）内は燃えなかった館】

一号地：猛獣競進会、上野戦争活人形、娘玉乗り江川一座【清遊館】、地獄極楽の活人形、猿芝居、東洋技術

二号地：玉乗・開運館、足芸

三号地：玉乗都一座【金箕館】、撃剣会野見一座、（常盤座）

四号地：大人形【大黒館】、娘の水芸【毛利館】、西洋手品中村一登久、（電気奇術）、（日本パノラマ館）
（東京朝日新聞 明治29年4月12日付記事より）

火元となったのはからくり仕掛けの大人形を見世物としていた大黒館で、

此小屋の中には高さ一丈八尺の傀儡師人形を造りて、せり出しの仕懸をなし、此腹の中よりは種々の人形を出して見せ、最後に観世音の像を見せる仕組なるが、此観世音の像の前には二本の蠟燭を点して、見物人に左も難有さうにみせる工風に設けたり。（『風俗画報』114号より）

といったように、からくりの中に蠟燭を仕込んでおり、それが倒れて燃え広がったことが原因であった。もともと防火上の懸念を一因として形成された六区であったが、この火事以降、期間の決まった仮設の興行ではなく、防火設備の整った常設館の設置がより推奨されていくようになった。

そして明治30年代になると、確かに興行は常設館が中心となっている。1904年（明治37）正月の事例を新聞より抜き出してみた。

【明治37年正月の出し物】

（昼）江川一座の玉乗（夜）自転車曲乗（大盛館）／浪花踊（清遊館）／娘美団一座（第二共盛館）／青木一座の玉乗（第一共盛館）／都踊（日本館）／手踊と剣舞（清明館）／太神楽（明治館）／活動写真と馬上の打球（電気館）／珍世界／連合軍天津総攻撃（日本パノラマ館）／花屋敷／世界大蓄音器（凌雲閣）／野見撃剣場

（東京朝日新聞 明治36年12月31日付より）

後述する電気館や、生人形・珍獣・電気製品・天狗の頭骨など、珍奇なものを集めた見世物興行の集大成とも言える珍世界のような新しい施設もある一方、大半の演目は20年代と大差ないものになっている。この状況に対し、同時期の紙面には下記のような手厳しい評も載せられている。

見世物評判 新年の浅草公園六区に於ける新年の興行物は何？ 何の小屋も看板だけは新しく取替へて評判々々と頻りに客を呼んで居るとは云へ、年中目先の変りない玉乗や少女芝居や浪花踊、都踊、剣舞、太神楽などでは何うも見物する気になれないのだ（読売新聞 明治37年1月4日付より）

常設化によって安定した興行が営まれる一方で、演目自体がマンネリ化していた状況が記事より伝わる。

3. 電気館の登場

六区が停滞しつつあった明治30年代、新たな興行が西洋より輸入され、登場している。活動写真、いわゆる映画である。1896年（明治29）11月、エジソン発明の「キネトスコープ」が神戸で公開された。これは箱の中で投影される映像をのぞき見る形式で、日本で最初の映画公開となった。1897年（明治30）にはフランスからスクリーンに投影する形式の「シネマトグラフ」が輸入され、2月に大阪で興行（有料上映）が行われている。そして同年3月5日には、浅草六区の日本パノラマ館向かいに仮設された「シネマトグラフ館」で東京初の公開がされるはずだったが、トラブルにより果たせず、翌日神田錦輝館で始まった「ヴァイタスコープ」による興行に初めてを譲

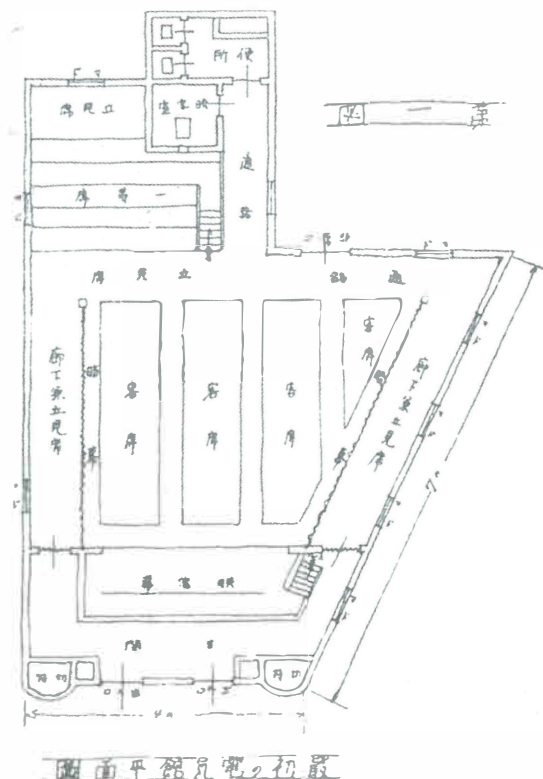


図6 初期の電気館平面図 加藤秋「我國に於ける活動寫眞館の建築沿革」
『建築新潮』第6巻1号 1925年より転載

る形となった。その後4月になってシネマトグラフ館での興行が始まり、ようやく浅草に活動写真の灯がともった⁸。その後様々な劇場や、浅草花屋敷などでも活動写真が上映されたが、当時は輸入される作品本数も限られていたため、期間を区切った興行のみであった。しかし、徐々に作品のストックが出来、常設も可能になったことを受けて、1903年（明治36）10月2日（1日説もあり）、日本最初の活動写真常設館「電気館」が六区三号地に開館した。当初は他の劇場などで既に封切られた作品を上映する小規模館で、六区の中でも数ある観物場の一つに過ぎなかった。しかし、1904～05年（明治37～38）頃より日露戦争の戦況を取材した作品が現れ、活動写真自体の人氣が高まり始める⁹。

電気館は目下日露戦争活動写真にして、去る十月廿三日より東郷大将伊勢大廟参拝、横浜沖大観艦式、東郷大将凱旋、元禄踊等を差加へたり。（明治38年11月19日付 都新聞）

そしてこの時期から、電気館は拡大、改装を重ねていく。その流れを公文書により見ていこう。当初の電気館は、六区三号地12番～14番の土地に建てられており、図6のような形状をしていた。図の右上が空いているのは、15番地に当たるこの部分の土地を取得していなかったためと思われる。

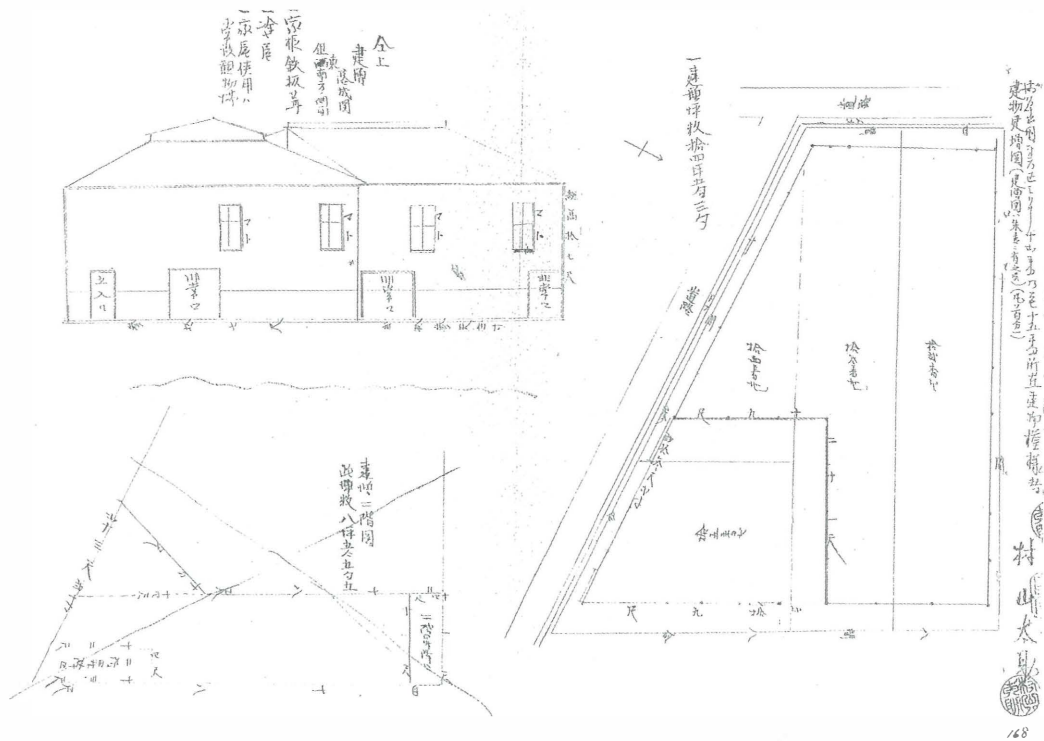


図7 明治39年電気館増築時の申請図面
『明治39年 第1種 土地・公園地・第4号・5冊ノ4』所収 東京都公文書館所蔵

るが、1906年（明治39）11月26日にその部分を建て増しする旨の届けを出している（図7）。そして12月17日に増築を終え開館した。この時には畳と椅子の2種類の上等席を新たに設けるなど¹⁰、内部にも手が加えられたようだ。さらに1908年（明治41）には太神楽を主に開催していた隣接の明治館を取得し¹¹、第二電気館と名前を変えて1909年（明治42）1月に改築開館している。そして同月中には早くも休館し、第一・第二電気館を合併してさらに増築、新たな電気館として同年3月10日に開館した¹²。なおこの時、当時の六区では最大の高さとなる全高およそ60尺（約18.2m）の建物になったと思われるが、公文書の記録の中ではそうした記述が発見できない。軒高25尺とした増築の計画は出されており、開館後となる3月13日には増築の落成届も提出されているため、表向きの届とは別の建築を行った可能性がある。この部分についてはまだ調査が必要であり、あくまで推論に過ぎないが、後述するこの建物の「高さ」がこの後の六区の形成に大きな影響を与えていると考えられ、非常に興味深い謎となっている。

さて、このような形で電気館はわずか2年ほどの間に幾度も増築、改修を行っていた。その理由としては、活動写真自体の人気上昇ももちろんだろうが、この時期に六区に競合する活動写真館が急速に増加したことも大きいと考えられる。次節では六区全体での活動写真館の展開について検証を試みたい。



図8-1 浅草六区における活動写真常設館の増加（明治39年） ※青く塗った箇所が活動写真の常設館



図8-2 浅草六区における活動写真常設館の増加（明治40年） ※青く塗った箇所が活動写真の常設館



図8-3 浅草六区における活動写真常設館の増加（明治41年） ※青く塗った箇所が活動写真の常設館



図8-4 浅草六区における活動写真常設館の増加（明治42年） ※青く塗った箇所が活動写真の常設館



図8-5 浅草六区における活動写真常設館の増加（明治43年） ※青く塗った箇所が活動写真の常設館



図8-6 浅草六区における活動写真常設館の増加（明治44年） ※青く塗った箇所が活動写真の常設館



図8-7 浅草六区における活動写真常設館の増加（明治45年） ※青く塗った箇所が活動写真の常設館

[表] 活動写真館新築・改築の届出に見る家屋の仕様

	館名 (開館時のもの)	内容	位置	地番	届出受理日	構造	建物の高さ(尺)		
							軒桁	棟上端	総高
1	電気館	増築	三号地	12-15番	明治39年11月26日	—	17	—	—
2	大勝館	模様替	一号地	1番	明治41年7月2日	—	24	—	—
3	富士館	模様替	四号地	9-11、18-20番	明治41年7月16日	—	—	23	—
4	大勝館	改築	一号地	1番	明治41年7月21日	二階建	28	—	—
5	(電気館)	(増築)	三号地	8-11番、12-15番	明治41年11月12日	—	—	—	(60)
6	旭館	模様替	一号地	1、30番	明治42年3月2日	—	24	—	56
7	オペラ館	装飾増設	一号地	1番	明治42年4月10日	—	24	—	—
8	日進館	新築	四号地	4乙-7、22-25番	明治42年8月27日	木造トタン葺	27	51	65以内
9	富士館	新築	四号地	9-11、18-20番	明治42年9月7日	木造トタン葺二階建		35	54
10	三友館	新築	四号地	1-4甲、25-27番	明治42年9月23日	木造垂鉛葺二階建	37.5	55	65
11	大勝館	新築	一号地	1番	明治43年2月7日	木造二階建	31	46	65
12	フレー館	模様替	一号地	55-57番	明治43年2月9日	木造トタン葺二階建	34	42.5	58.5
13	帝国館	新築	四号地	13-16、60-62、88-93番	明治43年7月2日	木造トタン葺二階建	31.5	43	59
14	世界館	模様替	一号地	1、30番	明治43年10月26日	木造鉄板葺二階建	45	—	63
15	日ノ出館	新築	二号地	38-39、43-44、46-47番	明治43年12月1日	木造トタン葺二階建	28.5	34	45
16	金竜館	新築	三号地	78-89番	明治43年12月5日	木造トタン葺二階建	34	47	65
17	パテー館	新築	四号地	69-75、78番	明治44年4月11日	木造トタン葺二階建	36	52	54
18	千代田館	改築	三号地	1-6、26-29番	明治44年7月20日	木造鉄板葺三階建	42	54.5	65
19	オペラ館	新築	二号地	1番	明治44年8月10日	木造垂鉛引き鉄板葺三階建	45	55	65
20	富士館	新築	四号地	4乙-11、18-24番	明治44年10月6日	木造垂鉛鍍平板葺三階建	41.5	54	63.5

東京都公文書館所蔵の浅草公園六区への建築届のうち、明治39～44年までのものを集計した。なお館名の特定には『映画史料』等を参考とした。

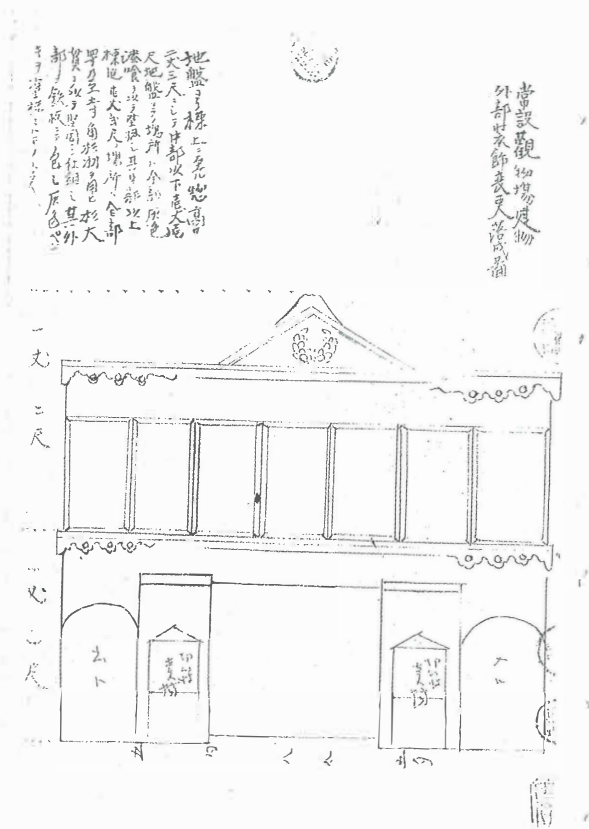


図9 珍世界から富士館への模様替時の申請図面
『明治41年 第1種 土地*公園地・第4号・5冊ノ3』所収 東京都公文書館所蔵

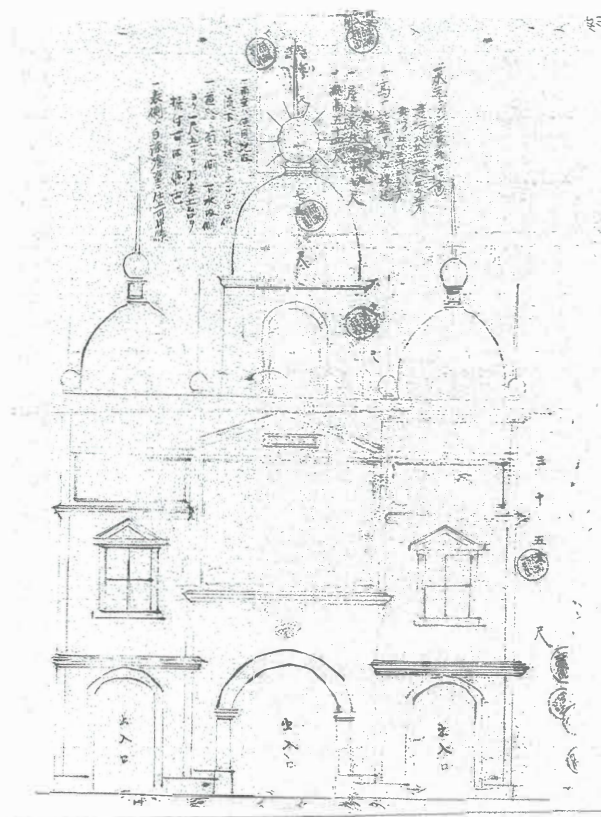


図10 明治42年富士館新築時の申請図面
『明治42年 第1種 土地*公園地・浅草・冊ノ7-5』所収 東京都公文書館所蔵

4. 活動写真館の増加と変容

それでは、最初に述べた明治40年代の間で、電気館を含めた六区の活動写真館がどう展開していったのか見ていこう。まず電気館に続き1907年（明治40）には、六区における2件目の活動写真常設館「三友館」が開館している。こちらは勸工場開進館を改装したものであった。そしてその登場を皮切りに、浅草六区には活動写真館が次々と開館するようになり、活動写真街としての様相が形作られていった。（図8-1～7）図の通り、1912年（明治45）までに通りに面した興行場の大半が活動写真館となっている。これほどのスピードで業種が代わっていくというのはどういった状況だったのか。ここでも公文書、特に建築の際の届出に添付されている建物の図面を参考として、その変化を追ってみよう。

まず富士館の場合である。富士館は前述した「珍世界」を模様替する形で1908年（明治41）に開業している。この時は模様替、としている通り建物自体には大きな変更を加えていないものと思われるが（図9）、翌年には早くも建物の新築を行っている（図10）。そして1911年（明治44）には隣接館を合併し、さらに新築をした（図11）。現代では考えられないほど急速な建物の更新が行われ、また申請時の図面を見る限り、造形自体もより複雑に、高度になっていることが見て取れる。

次に世界館を見てみよう。世界館はもともと娘芝居を上演していた「第二共盛館」であったが、模様替を行い1909年（明治42）4月に「旭館」という活動写真館に変わり（図12）、8月にはその名称を記念大勝館と改めた。そして翌年10月には更に装飾変更を行い「世界館」と改称してい

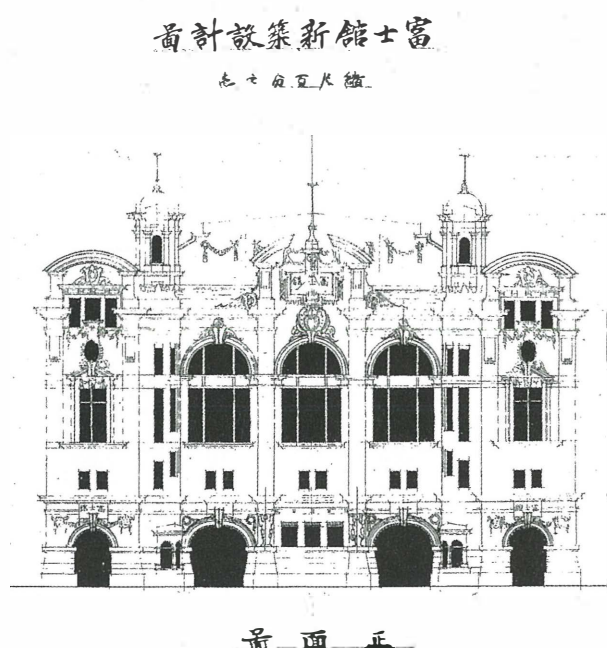


図11 明治44年富士館新築時の申請図面
『明治44年 第1種 土地・公園地・浅草3・冊ノ6-5』
所収 東京都公文書館所蔵

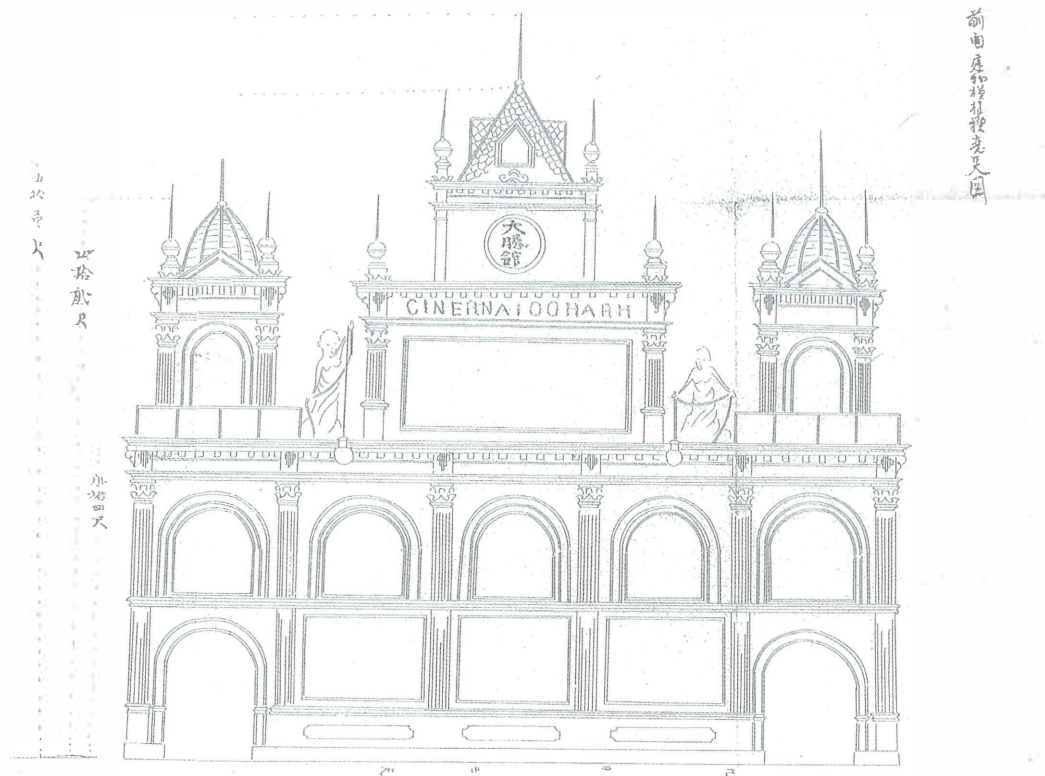


図12 旭館への模様替時の申請図面
『明治42年 第1種 土地*公園地・(浅草1)・冊ノ7-3』 所収 東京都公文書館所蔵

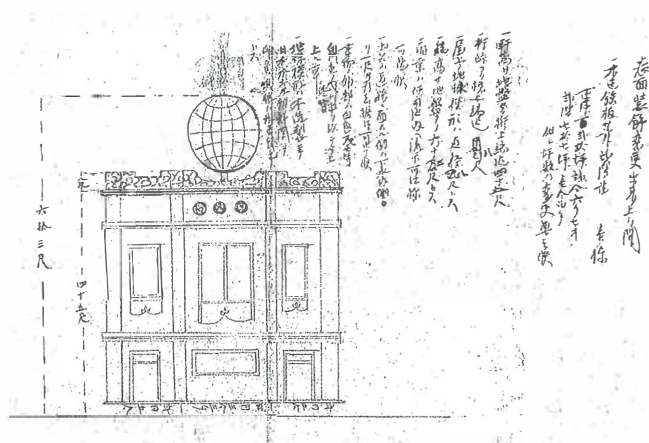


図13-1 世界館への装飾変更時の申請図面
『明治43年 第1種 土地*公園地・浅草・冊ノ4-4』
所収 東京都公文書館所蔵



図13-2 世界館の外観 1912年(明治45)1月頃
館蔵 10870498



図14 東京勸業博覧会の世界周遊館（絵葉書） 館蔵 88130496

る。世界館の名称の通り頭上には地球儀を掲げた特徴的な外観であるが（図13-1、2）、これらの改変を新築や増築として行っていない点は興味深い。また、世界館を含めこの時期の六区の活動写真館の建築は、1907年（明治40）に上野で開催された東京勸業博覧会をはじめとした、博覧会の建造物に近いものが多く見られ、事実同博覧会では地球儀を載せた「世界周遊館」という建物もあった（図14）。この博覧会で人気を博した観覧車が、常盤座の経営者であった根岸浜吉によって浅草六区に移設されたということも考えると、当時の最先端であった博覧会を強く意識して街が作られていたこともうかがえる。そして世界館のように、それを看板を挿げ替えるがごとく装飾変更によって実現するというのは、興行街であった浅草六区という街の特性を強く感じさせるものとなっている。

ただ、富士館の事例の通り、短期間で建築はさらに高度化していき、より本格的な建築も登場している。オペラ館は都踊りなどを実演していた「日本館」を改築（届出上は装飾増設）し、1909年（明治42）5月に活動写真館として開館しているが、1911年（明治44）8月から長期の休館に入り、建物を新築して1912年（明治45）1月1日に再開館した（図15）。この時には奥村隆之助という人物が設計をしており¹³、届出に添付された仕様書には、建物がルネッサンス式三階建であるとの記載¹⁴もあるなど、博覧会の模倣を超えた、劇場や活動写真館にふさわしい建築を志向したように思われる。このような形で、わずか5年の間に活動写真館が増え、その建築も競い合うかのように大型化、高度化していった。

常設観物場新築構造図

縮尺百分寸と

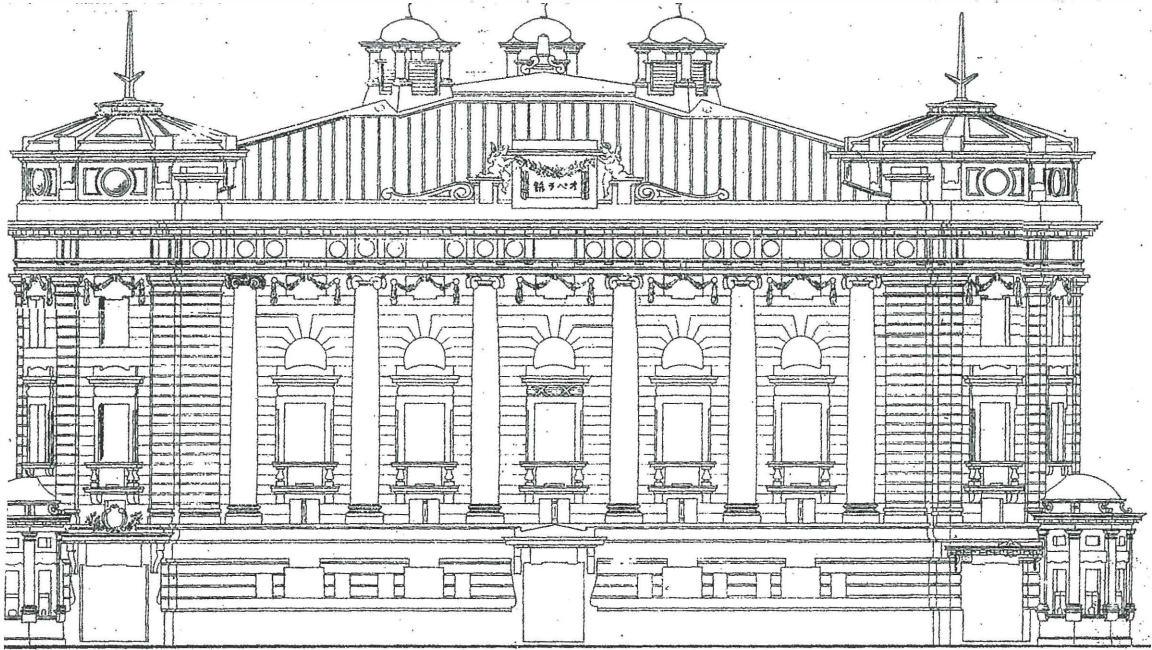


図15 明治44年オペラ館新築時の申請図面
『明治44年 第1種 土地*公園地・浅草3・冊ノ6-5』 所収 東京都公文書館所蔵

5. 興行街から活動写真街へ

それでは何故六区にこのように活動写真館が集まるに至ったのだろうか。映画の配給会社の増加や国産の劇映画登場など、それには様々な要因が考えられるが、ここでは引き続き公文書を資料として、その理由の読み解きを試みたい。まず表をご覧いただきたい。こちらは活動写真館各館の様替や増築・新築の際の届出を抽出し、記載されている建物の仕様をまとめたものである。このうち5番の電気館については、前述の通り実際に建てられた建物の仕様が届出からは確認できなかったため、総高については後述の他の公文書を参照し記入している。

さて、表を見ていくと、5番の電気館の建築以降、建物の全高が急速に高くなっていること、そして元々の建物を改築して使用していたものが、その時期より新築することが殆どになっていったことが大まかながら読み取れる。何故このような急速な変化が起こったのだろうか。まず前提として、浅草公園内での建築規制の緩和があった。そもそも、浅草公園内には当初より厳しい建築規制があったが、六区における見世物小屋などについては、別扱いとされていた¹⁵。しかし最初の電気館が建てられた時点では軒高が16尺までという制限があったとの記述があり¹⁶、この表で見えるような総高60尺といったようなものは本来建てられなかったものと思われる。それを大きく変えたのが、1909年（明治42）10月16日に出了た浅草公園六区の建物に関する新たな規定である。

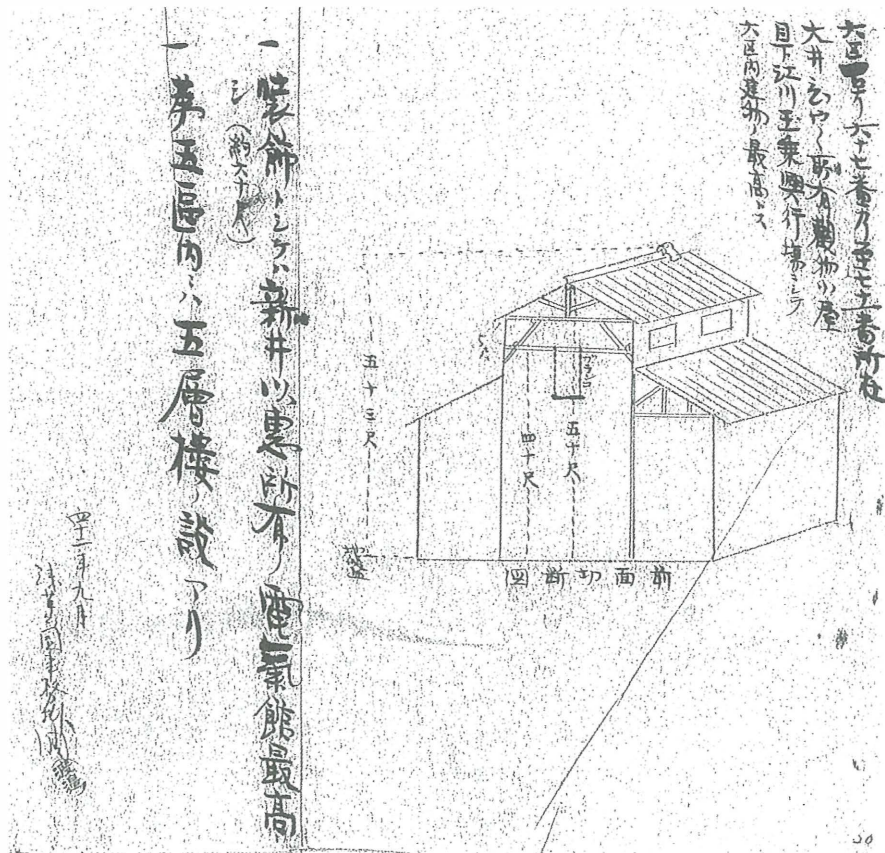


図16 六区高さ制限提案書類の付図
『明治42年 第1種 例規*土地・職工・工夫・籍人・財務・雜件・物品・4冊ノ4』 所収 東京都公文書館所蔵

この時、建物の高さについて

- ・軒桁上端は地盤より45尺以内
- ・棟上端は地盤より55尺以内
- ・屋上建設物上端は地盤より65尺以内

と従来の規定より大幅に緩和する形で数値が定められた。この数値をもとに先程の表を見ると、基本的にその限界値に近い形で高さが定められていることが分かる。一方で、制定の日付以前から大型化は始まっており、その影響に疑問も生じる。そこでこの規定を定めるに当たっての提案文書を見てみると、興味深い記述があった。

明治42年9月18日提案 浅草公園第六區内建物高さ制限ノ件

浅草公園第六區ハ近來活動写真ノ流行ニ伴ヒ建物改築ニ際シ競フテ其高サヲ高メントスルノ傾向有之殆ント底止スル所ナキ状態ニ付觀音堂火災豫防若クハ震災等ヲ慮リ今ニ於テ相當制限ヲ為ス 適當ト認ムルニ付全區内現在最高ノ建物等ヲ參酌シ今後ノ建設ニ就テハ左ノ範圍内ニ於テ許可セントス

この記述によれば、六区では活動写真の流行に伴い、より高い活動写真館を建てようと競う状況があり、それを底止すべく現状最も高い建物の高さをもとに数値を定めたのだという。そして、この文書には付図があり（図16）、六区における最も高い建物として、建物自体は江川玉乗り（江川大盛館）の53尺、そして装飾を含めた最高として電気館の約60尺が挙げられている¹⁷。前述していた電気館の総高は、この記述を元にしたものである。

これらの情報を整理すると、以下のような推論が浮かぶ。この時期電気館は従来からの制限を無視し（あるいは黙認され）、活動写真館としては最大の建物を建て、それに触発されて旭館や日進館などが負けじと大型館を建てる状況が生まれ、その動きに対応する形で東京市が新たな制限を（現状を追認するものとして）設けた、という流れである。

当時電気館は映画配給会社吉沢商店が運営に携わっていたが、吉沢商店を率いていた河浦謙一は、アメリカの博覧会を参考に「人を寄せるにはまず建物で驚かすのが早い」という信念のもと、電気館の改造を手始めに活動写真館を欧米式に建造していったと語っている¹⁸。それが公文書の上からも確認できた形となる。そしてその動きに他の興行主・館主も対抗・追隨していった結果、あのような特徴的な街並みが生まれたのだ。

そして、建物の変化はただ人を驚かすだけではない。大型化することによって収容人数が多くなり、また明治39年の電気館の増築の際のように上等席などを設置する余地も生まれる。明治44年以降には三階建も次々と建てられ、それは加速していった。もともと六区は見世物興行時代の値段設定を引き継いでいて、活動写真においても木戸銭（入場料）は安く、運営の足かせにもなっていたが、大型化によってそれが改善し、活動写真館の進出がし易くなったことも想像される。

また、大型化に寄与する要因として、そもそも六区が東京市の管理する公園地であったことも挙げられる。電気館や富士館のように、隣接館の土地を取得して増築した例は多いが、土地の使用権を収受するのみでそれが行え、かつ埋立地だったため古くからの居住者がいないことは、館の拡張を容易に仕ただろう。

おわりに

浅草六区が映画の街になっていった経緯は、従来だと見世物興行が次々と活動写真に切り替わったから、そして金竜館で封切られた「ジゴマ」が人気を集めたから、といったことが言われてきた。もちろんそれは重要な要素であるが、公文書を切り口に見ていくと、それと並行する行政側の意図、そして公園地の特色といったものも垣間見えた。特に明治42年の規定などの動きは、ある意味行政側が、新しい興行である活動写真の流行を意識しつつ、それを六区に集めていこうという考えが少なからずあったことを想像させるものとなっている。当時の活動写真館は新築しようとする、風紀を気にした住民から反対運動を起こされる場合もあり、六区に集まることが

都合が良い面もあったと思われる。それはかつて浅草の猿若町に芝居街が形作られたという状況にも一種似るものかもしれない。

さて本稿はシンポジウムでの報告が元になっているため、資料としての公文書の紹介が中心で、考察としては雑駁なものとなってしまったことは否めないが、従来の研究に加え、こうした資料を活用していくことで、より多面的に六区の発展を捉えていくことができるだろう。

註

- 1 日本映画情報システム（<http://www.japanese-cinema-db.jp/>）により検索。
- 2 柴田勝「東京の活動写真（映画）常設館の変遷1～10」『映画史料』第8～17集掲載
- 3 稲葉和也「六区の成り立ちと街の形成」『台東区文化財調査報告書第五集 浅草六区—興行と街の移り変り—』台東区教育委員会 1987年
- 4 上田学『日本映画草創期の興行と観客 東京と京都を中心に』早稲田大学出版部 2012年
- 5 三府ヲ始人民輻輳ノ地ニシテ古来ノ勝区名人ノ旧跡等は迄群集遊観ノ場所（東京ニ於テハ金龍山浅草寺東叡山寛永寺境内ノ類、京都ニ於テハ八坂社清水ノ境内嵐山ノ類総テ社寺境内除地或ハ公有地ノ類）従前高外除地ニ属セル分ハ永ク万人偕楽ノ地トシ公園ト可被相定ニ付府県ニ於テ右地所ヲ択ヒ其景況巨細取調図面相添ヘ大蔵省ヘ可伺出事 明治六年一月十五日 太政官
- 6 『台東区史 社会文化編』台東区役所 1966年 p287
- 7 『台東区史 社会文化編』台東区役所 1966年 p298
- 8 田中純一郎『日本映画発達史Ⅰ』中央公論社 1980年 p28～66
- 9 田中前掲書 p114～124
- 10 「増築工事落成後上等席は疊及椅子の二ヶ所に致し有之候」（『都新聞』1907年（明治40）1月15日付広告）
- 11 明治41年7月3日付で使用換願いを出していることが届出より確認できる。
- 12 「電気館の改築 浅草公園電気館は場内の狭隘を感じ舊臘更に第二の電気館を設けしも尚不足なるより今回大規模にて欧米の劇場式に慣ひ建築中なるが本月中には落成すべく尚普請中は東京館を假興行場に宛て居れり」（『都新聞』1909年（明治42）2月5日付記事）
- 13 加藤秋「我國に於ける活動寫眞館の建築沿革（四）」『建築新潮』6巻1号 1925年 p119 なお、届出に付された仕様書に用いられている用箋は「奥村工務所」のものである。
- 14 本建物ハ「レジャーサンス」式木造三階建ニシテ…という記述が見られる。
- 15 浅草公園地改正方法 明治17年1月16日
四 第五区内ノ建物ハ寫眞師ヲ除クノ外軒高サ地盤ヨリ桁上端迄一丈以内建設セシムヘシ
十一 第六区内ノ建物ハ觀セ物小屋寫眞師料理屋飲食店寄席を除クノ外軒高サ屋上ハ第五區ニ同シ
- 16 加藤秋「我國に於ける活動寫眞館の建築沿革」『建築新潮』6巻1号 1925年 p16
- 17 六区一号六十七番乃至七十一番所在 大井ひやく所有觀物小屋 目下江川玉乗興行場ニシテ六区内建物ノ最高トス
一、裝飾トシテハ新井以恵所有ノ電気館最高トシ（約六十尺）
一、第五区内ニハ五層樓の設アリ
- 18 田中前掲書 p128